

平成29年度 教育事業 青少年教育施設ボランティア養成講座（25年目）

1 事業概要

愛媛県内から参加した大学生・高校生が、青少年教育施設ほか様々な地域でボランティア活動を行うための基本的な知識・技術を2日間にわたり実践的に学んだ。室内での講義や演習(アイスブレイク等)、屋外では「ダッチオープン」を用いた野外炊飯の研修を行った。また当施設法人ボランティアが各班のスタッフとして参加し、参加者と密接に関わりながら全ての活動を行った。



2 事業の目的（ねらい）

国立大洲青少年交流の家が主催する教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助などを担うボランティア人材を育成するとともに、青少年教育及び人材育成の観点から、地域社会へ貢献しようとする人材の育成を図る。

3 企画・運営のポイント

本年度は、既に登録をし、事業の運営補助の経験がある法人ボランティアに班付きスタッフの役割を与え、一部演習や講義を担当させることとした。また、例年依頼していた講師から国際交流・地域おこしを实践する講師へ新たに変更し、施設外で豊富な社会教育経験を有する専門職の講義を行った。演習ではダッチオープンを使用し、当所の事業における野外炊飯全般における基本的な技能を身に付ける研修とした。広報においては、4月初旬に他事業打合せの為の大学訪問に合わせ、先行チラシを作成し、新入生セミナー等での案内を行った。

4 期待される効果

6つの効果を意識して計画を行った。1つ目に、法人ボランティアが班付きスタッフとして密接に参加者と関わる事で、参加者の細かな様子の把握と直接的なコミュニケーションが図れ、今後共にボランティア活動を行うために必要な関係性の構築が期待される。2つ目に、国際交流・地域おこしを实践する講師を招くことで、施設外のネットワークを形成され、幅広いボランティア活動への参加が可能になる。3つ目に、施設外で豊富な社会教育経験を有する専門職も一部講義を担当することで、参加者以外に法人ボランティアの学びも深められる。4つ目に、演習(アイスブレイクゲーム)を法人ボランティア各自が担当することで、実践的な経験を得られる。5つ目に、事業で多々使用されるダッチオープンの演習を設け、炊飯活動全般の基礎的な技術を習得し、即戦力として育成できる。6つ目に、ボラミックスクャンプで起案されたボランティア自主企画の報告会を講義に設けることで、法人ボランティア自身の目的意識の向上を図り、新たに法人ボランティアとなる参加者に対しても意識付けが図れる。

5 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

6 後 援 愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会・愛媛新聞社

7 期 日 平成29年9月23日(土)～24日(日)

8 場 所 国立大洲青少年交流の家

9 対 象 教育支援ボランティア活動に興味・関心のある高校生、大学生、専門学校生、
社会人等の青少年（29歳以下）

10 参加人数 23名(募集20名) {内訳：高校生10名・大学生13名}、法人ボランティア6名

11 参加費 3,500円

12 講 師 浅野 長武 氏（佐多岬半島ボランティア郷づくり 喜久屋プロジェクト副代表）
大洲地区広域消防事務組合 消防署員、国立大洲青少年交流の家 職員

13 日 程

	10:00	10:30	11:00	12:00	13:00	16:00	17:00	18:30	20:00	21:00	22:00	22:30
23 日 (土)	受付	開 講 式	ボラン ティア 活動の 技術Ⅰ (アイス ブレイク)	昼食 ・ 休憩	安全 管理 (普通 救命 講習)	青少 年 教育 施設 の現 状と 運 営	夕食 ・ 休憩	青少 年 教 育	入浴 ・ 休憩	青少 年 教 育 施 設 に お け る ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 Ⅰ		就 寝

	6:30	9:00	10:30	13:30	14:30	15:00
24 日 (日)	起床 つどい 朝食	ボラン ティア 活動の 意義	ボラン ティア 活動 の技 術Ⅱ (野外 炊飯)	青少 年 教 育 施 設 に お け る ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 Ⅱ	閉 講 式	解散

14 活動内容

【1日目】

開講式後、「ボランティア活動の技術Ⅰ(アイスブレイクゲーム)」として、初めて出会う参加者・スタッフ全体の緊張をほぐし、その後の研修効果を促進するための活動を行った。例年は職員のみで実施していたが、今回は法人ボランティアも順次指導者側となり、職員と共にゲームを行った。また、指導時以外は職員やボランティアも参加者と混ざって活動し、交流を深めた。最後のふりかえりではゲームの順番、場所や対象者への注意点、手を繋ぐ等身体接触を伴う内容への流れを学んだ。参加者はゲームを体験し楽しみながら学ぶとともに、法人ボランティア自身も指導技術を高めることができた。

昼食後は、「安全管理(普通救命講習)」を地元の大洲地区広域消防組合消防署員が行った。心臓発作や意識不明時など緊急時に行う人工呼吸法、AEDの使用方法等について学び、一連の工程を身体で習得できるよう、繰り返し反復して行われた。また、骨折や裂傷など施設での野外活動時に起こりえる怪我への対応も学び、ボランティア活動時に必要不可欠な救急法を学ぶことができた。その後、「青少年教育施設の現状と運営」の講義を職員が行った。KP法(紙芝居プレゼンテーション法)にて青少年教育施設の持つ機能や役割について学ぶとともに、活動時に必要となる施設の特徴(宿泊室や主要活動場所)を理解し、活動時における機能や使い方を職員が解説した。また、夕べのつどいにも参加し、他団体との交流を行うなど青少年教育施設の持つ機能も体験した。

夕食後は、「青少年教育」の講義を当所企画指導専門職員(清水 大輔氏)が行った。清水氏は全国の自然体験活動を支援・表彰する「第13回トム・ソーヤースクール企画コンテスト」で最優秀賞を受賞した「御五神島(おいつかみじま)・無人島体験事業」に運営スタッフとして数年関わり、教職現場でも社会教育経験を有している。無人島事業は10日間に及ぶサバイバルキャンプで、その時の体験を基に青少年教育の課題や、発達段階に応じた体験活動の必要性について講義が行われた。参加者はスライド写真に写る、子ども達の生き生きとしたキャンプでの表情を見ながら、熱心に講義に聞き入っていた。1日目最後に、「青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅰ」の講義を法人ボラン

ティアが行った。当所での年間のボランティア活動ムービーを上映し、教育事業の様子やボランティア活動の様子を参加者に伝えた。また法人ボランティア各自が「なぜボランティアを行うのか?」「どうして続けているのか?」を自分の想いを交えながら参加者に伝えた。ボランティアの言葉に耳を傾けながら、参加者は自分自身が活動していく為の意欲やイメージを膨らませていた。

【2日目】

朝のつどい、朝食の後「ボランティア活動の意義」として、浅野 長武氏（佐多岬半島ボランティア郷づくり 喜久屋プロジェクト副代表）による講義が行われた。愛媛県佐多岬半島でみかん農家を営む代表者と共に、国際交流団体と連携し、自らの自宅を宿泊場所として外国人を受け入れ、農業体験を主活動に地域の伝統行事に参加する等、地域住民や日本人学生を巻き込んだ地域おこしを実践している。講義では実際の交流活動をスライドで紹介するとともに、「夢は自分を知ることから」をテーマに、自分を知るためには他人と関わる事が必要であり、そのためにボランティア活動が最適であることを参加者に伝えた。その後、初めての野外活動となる「ボランティアの活動の技術Ⅱ（野外炊飯）」を当所職員が行った。教育事業で多々使用するダッチオーブンを使用し「ローストチキン作り」を行い、参加者は火おこしの方法や器具の使い方、オーブンメンテナンス、安全管理を学んだ。オーブンの蓋を開け、完成したローストチキンを見た各班からは次々に大きな歓声が上がった。班の仲間と楽しく交流し、協力して調理する参加者の姿が見られた。最後に「青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅱ」として法人ボランティアの登録制度について、職員が講義を行った。

15 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

*** 満足 : 83%** *** やや満足 : 17%** *** やや不満 : 0.0%** *** 不満 : 0.0%**

- 一班に一人法人ボランティアの方が付いてくれたので、活動しやすかった上、班の中の絆を感じることができた。
- 職員の方全員が優しく面白くて、とてもフレンドリーなところが素晴らしいと思いました。ボランティア活動に参加するのが楽しみです。
- 喜久屋プロジェクトにも参加したいと思いました。地域への愛が国を越えて共有され、異文化理解にもつながっていると感じました。
- 最初は不安だったがアイスブレイクで一気に心がほぐれた。まず、その凄さにとっても驚いた。今回の企画で自分が次第にボランティアに魅せられていくことを実感した。もっと参加していきたいと思った。

16 事業の成果

今回の参加者23名の内、ボランティア養成講座後から3ヶ月内の当施設事業に12名が参加しており、半数以上の参加者が新たに法人ボランティアとして活動を行っている。アンケート満足度は昨年度より15ポイント以上高く、満足度が向上した。法人ボランティアや参加者の声からも、良好な関係性が構築され、強い参加意欲持つ等、概ね期待される効果と同様の成果が得られた。また先行チラシにより、募集開始となる7月までの期間で9名の申込があり、一定の効果があつたといえる。

17 事業の課題

他施設のボランティア事業と比べると、やや参加者数が少ない。ボランティア自主企画など今後のボランティア活動を促進していくためにも、さらに多くのボランティアを募集し養成するとともに、新規登録者が継続的に活動に参加し、定着する仕組み作りが必要である。今回新たな講師を招聘したが、法人ボランティアや参加者の声において好評であったため、毎年でなくとも随時新たな講師を招き、法人ボランティア自身の学びも促進できるように努めたい。

(担当：事業推進係員 成松 恵)